資料４

鉄釣灯籠（てつつりとうろう）　宝治三年銘（ほうじさんねんめい）

＜概要＞

員　　数　　１基

法　　量　　総高 31cm

時　　代　　鎌倉時代（1249 年）

鉄製、鍛造によった六角形釣灯籠である。本品は、高度な鉄の鍛造技術によって総体を形作り、火袋（ひぶくろ）[1]の羽目板（はめいた）[2]に文様と銘文を透彫（すかしぼ）りしている。水平をなす笠や鐶台（かんだい）[3]の形と菊座刻み[4]、そして何よりも笠に比べた火袋の量感の豊かさなど、いずれも鎌倉時代の造形の特色とみて差しつかえなく、銘のとおり宝治３（1249）年に製作、調進されたものと判断される。

本品を伝える密蔵院は、嘉暦（かりゃく）３（1328）年、慈妙（じみょう）[5]の創建になる天台宗寺院である。本作は密蔵院の創建以前のものであるが、本尊薬師如来立像（重要文化財）が平安時代後期の作であることからも、密蔵院の前身あるいは周辺地域に何らかの薬師如来を祀（まつ）る仏堂が存在し、そこに用いられた釣灯籠だったことも想定できよう。

いずれにせよ本作は、紀年銘をもち鎌倉時代半ばまで遡（さかのぼ）る鉄釣灯籠として、愛知県のみならず全国でも最古級の作例であり、県有形文化財として指定するにふさわしいものである。

---

1 灯籠等の火をともすところ。
2 壁の同一平面に張った板。
3 金属製の取っ手を取り付ける台。
4 菊の花の形にした座金。
5 1291－1368　鎌倉-南北朝時代の天台宗の僧。尾張に密蔵院をひらく。

鉄釣灯籠　宝治三年銘（愛知県提供）